



## 第4期研究プロジェクトを立ち上げます

こどもみらい館では、平成28年度から第4期研究プロジェクトを立ち上げます。次期研究プロジェクトでは第3期の成果、今後の課題、研究アドバイザーの先生方の講評を踏まえ、子どもの育ちの連続性研究プロジェクト、子育て支援研究プロジェクトそれぞれが更に研究を深めて行きたいと思えます。

### 子どもの心の育ちの連続性

第3期では、「自信を育み、つなげる」をテーマに研究を進め、乳幼児期には、保育者側からできるようになるためにやらせて、できたことを褒めて付けさせた「条件付きの自信」ではなく、ありのままの自分でいいんだと思える「基本的な自信」がまずは大切であり、そこが十分に満たされることで、自分からやってみようと思える「それら全体が自信だ」と捉えました。

乳幼児期の「自信」と児童期の「自信」は同じじゃないんだ！

私たちは本当の「自信」を育てられてる？

「自信」を育みつなげていくためのキーは大人のかかわりの連続性かも？

第4期では

子どもの心がどのように育っていくか、就学前と小学校入学後の姿を追い、私たち就学前施設の保育者や小学校教師の心持ちの在り様を探ります。

### 子育て支援

第3期では、子育て支援に対する考え方を本音で語り合うことから始め、保護者の抱えるしんどさについて探る中で、目に見えない子どもや保護者の「心」を感じ、親子の気持ちにどう寄り添えるか「懐の深い支援」をすることの大切さを実感できました。

保護者の抱えている悩みとはどのようなことなのか！

私たちは保護者の気持ちに寄り添えているのか？

気持ちに寄り添うためにはかかわり方の基本を知っておくことが大事では？

第4期では

保護者が何に困り何を求めているのかについて、基本的枠組みを作ると同時に、様々な保護者に個別に対応するためのアイデアを集め、保護者との関係を築いていく方法を探ります。

**28年6月からスタートします。参加お待ちしております！**

平成27年10月29日(木)

## 子どもの心の育ちに目を向けて、エピソードで保育を考えてみませんか

～保育園(所)・幼稚園・認定こども園の垣根を越えてつながろう～

講師 鯨岡 峻 中京大学客員教授

エピソードは、自分の保育をどう書くかですが、人の書いたエピソードをどう読むかということもとても大事なことです。両面考えられるようになったときに初めてエピソードを書くことが保育に活かされていくこととなります。またエピソードを書くということは、自分がその場の当事者だということです。書き手の思いはいろいろあり、読み手のその理解はこれが正解ということはありません。書かれている文章は限られていて、書かれていないこともあります。読み手は、それを斟酌しながら“この保育者はどのような思いでこの場面を生きたのだろうか”ということを一瞬懸命考えます。このように、エピソードを読むということは大変難しいことなのです。そして今度はそれを自分に置き換えてみて、“自分の保育はどうだったのだろうか”ということを考えることが大事になります。

日頃の保育の場面では、子どもの気持ちを「受け止めた」つもりという言葉かけはいろいろありますが、案外その言葉に心がこもっていないことがあります。これが子どもから見ると一番嫌な言葉かけで、“先生の言葉に心がこもっていない”だから結局“先生には自分の気持ちを分かってもらえない”となります。これが、今私がいろいろなところで「気をつけてください」と言っている事です。「受け止めた」つもりになっけていても、その子には届いていないのです。

エピソードは、客観的に見た保育日誌の記録とは全く違うもので、目に見えない『接面』での出来事を描くものです。『接面』とは、保育者が子どもたちとの間で作り上げる独特の雰囲気を持った空間のことです。その『接面』で起こっていることがある意味では保育で一番大事なことで、そこで起こっていることにどれだけ踏み込んで表現できるかが大事なところなのです。そこがしっかり描かれれば読み手はエピソードの中味に入り込んでいくことができます。こうしてエピソードを書くことに慣れてくると、保育者は自分をしっかり振り返ることができるようになり、自分自身と向き合い、自分では気付かないことが見えてくることで元気になり、自分に自信が持てるようになってきます。エピソードを読むことの奥深さを感じ、自分も“エピソードを書いてみようかな”と是非思っていたきたいと思います。そして、それを通して、子どもの“心を育てる”保育に踏み込んでいってほしいと思います。

講義の詳細は、[要録ページ](#)をご覧ください。 [要録ページ](#)

## 気になる子どもに寄り添う保育とは

講師 小枝 達也 国立成育医療研究センター こころの診療部部長

子どもは様々です。同じ球を投げていてもうまくいかないことがあります。その子その子に合った球を投げるのが大切です。保育も同じです。その子に合った保育ができるような引き出しを持つことが大切なのです。また、子どもが投げた球を受けてばかりいては分からないことがあります。必ず投げ返し、相手の受け取り方を見てみましょう。返してくればそこそこ色々なことができます。かわしたり拒否したりするときは気を付けなければなりません。

ですが、早い段階で「この子はこうだ」と決め付けてしまわないでください。子どもは複雑で年々変わります。幼児期に大変な子どもであっても、健常児であったり、あるいは発達障害のある子どもであっても、将来大学で学んだり、一般就労したり、家庭を持って親になったりしている人がたくさんいます。しかし、放っておいてそうなるのではありません。そのときそのときに親が適切に手を打つことが大切です。

ですが、親は子どもを客観的には見ることはできないものです。それが親心です。そこで、園の先生方の気付きとその情報発信が大切になります。先生方は集団の中で様々な子どもを見ています。その中で客観的に一人ひとりを丁寧に確認していくことを心がけてください。そして親が感じている困り感を理解し、支援していきましょう。

特に幼児期には、行動の同調を見てください。一人違った行動をしていませんか。また、「これの次にこれ」というように次にあることの見通しが持てる「布置」が身についているでしょうか。そして、自分の気持ちに気付き、言葉で表すことができているでしょうか。そのためには保育の中でどのようにしていけばよいでしょうか。(具体的な方法については要録参照)

最後に、良き人間関係が指導の前提です。まずはその子どもと良い関係を作っておくことが大切です。子どものプライドを尊重してください。そして満足する日々が子どもを育てます。子どもが手応えを感じられる保育をしていってください。

この講演会のビデオ・DVDを貸出しています。 [貸出要項へ](#)  
講義の詳細は、 [要録ページ](#)をご覧ください。

## 学びをつなぐー保幼と小学校をつなぐー

講師 西川 正晃 大垣女子短期大学教授

保幼小連携は、「学びをつなぐ」ことが大事で、「学び」とは何かということについて共通理解が必要です。この「学び」が見えてくると保幼と小学校をつなぐ連携の考え方が見えてきます。

「学びをつなぐ」とは、幼児期に培われた「学びの芽生え」を、小学校以降の「学びの基礎」につなげ、「学びの連続性」を保育園(所)・幼稚園側からだけでなく、小学校側もしっかりと受け取り、「学び力」を向上させていくという両方からのアプローチです。

「学び」とは何でしょう。「これ知りたいな!」「不思議だな!」から出発するのが「学び」であり、「学び」のある学習とは、このような子どもの“ときめき”から始まります。そして、「学び」とは、ときめいて、心が動き、くり返すというプロセスを踏みしめることです。

保育園(所)・幼稚園では、砂場遊び、鬼ごっこ、制作、ままごとがしたいと心が動き、その遊びをくり返しやります。そして、その遊びの中でプロセスを踏みしめていると、結果的には、知識や技能、情報収集能力、人間関係調整力、道徳性の芽生え等いろいろな経験を獲得し、蓄積していくこととなります。<総合的な活動(融合期)>

小学校になると、これまでに蓄積した様々な経験や要素が、教科や活動など分化した世界でその力が発揮され、授業で鍛えられ、高められていきます。<教科などの活動(分化期)>

「学び」とは、一人ひとりに適切に用意された環境が、子どもの沸き上がって来る関心や意欲から自発的な活動を誘い、それを繰り返す過程で探究し続ける主体的な営みです。小学校教育に携わる先生方は、遊びの中に見られる「学び」の本質を知れば、カリキュラムに反映できると思います。そして幼児教育に携わる先生方は、小学校以降に展開される「学び」に責任をもつことが必要です。

保育園(所)・幼稚園、小学校の双方が「学び」というものを共通理解し、保育や授業の中で生かされることは何かを考えていくことが本当の保幼小連携であると思います。その本質をしっかり見据えた上で連携をますます発展させていただきますことを念じます。

この講演会のビデオ・DVDを貸出しています。[貸出要項へ](#)  
講義の詳細は、[要録ページ](#)をご覧ください。[要録ページへ](#)

子どもたちの今と未来のため、社会のあらゆる場で  
「京都はくくみ憲章」を実践しましょう!



この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ!



発行日 平成28年3月18日  
発行者 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館  
〒604-0883  
中京区間之町通竹屋町下る楠町601番地の1  
Tel (075)254-5001 Fax(075)212-9909